

## 歴博 暮らしの植物苑だより

第10回『日本の植物文化を語る』10月28日(土) 13:30~15:30 本館講堂  
「栗の文化・漆の文化ーアジアの中の縄文文化ー」 山田昌久 (首都大学東京)

第94回『暮らしの植物苑観察会』11月25日(土) 13:30~ 暮らしの植物苑  
「針葉樹のはなし」 齋木健一 (千葉県立中央博物館)

暮らしの植物苑今週の見どころ <http://www.rekihaku.ac.jp>

### 【予告】 伝統の古典菊

## 10月24日(火)~11月26日(日)

1999年以降、歴博では古典菊(嵯峨菊・伊勢菊・肥後菊・江戸菊)の収集・栽培を行なってきました。また2000年からは伝統の『古典菊』として展示を行なってきました。前回No.126では嵯峨菊・伊勢菊について、今回は肥後菊・江戸菊について少し説明をします。とくに今年は江戸菊の品種を増やしました。

古典菊(嵯峨菊・伊勢菊)の有償頒布を10月28日(土)10:00~12:00 暮らしの植物苑東屋で行ないます。詳しくはチラシを御覧下さい。

#### 肥後菊



“天女の舞”

肥後菊は肥後朝顔などとともに「肥後六花」の1つに数えられます。花は一重で花序を構成する花弁がきわめて少ないのが特徴です。花弁は平弁や管弁、さじ弁になるものがあります。熊本では、栽培も、また鉢植えせず肥後菊花壇を作るなどいまも独特の栽培法をもっています。

#### 江戸菊



“白駒”

江戸菊は平弁が開花するにつれて、花がさまざまに変化する(芸をする)のが特徴で、この変化を「狂い」といいます。この花形が成立したのは江戸時代後期の文化・文政期とされています。狂いが終わるのには1ヶ月近くかかります。今年は江戸菊の品種を増やしましたので、狂いの変化を御覧下さい。

①カンアオイ (ウマノスズクサ科カンアオイ属)  
 常緑の多年草で、短い茎の先端に葉をつけ、株が密集して生育します。枯葉などをどかしてみると花が見つかるかもしれません。花は地表ぎりぎりに咲いています、花には3枚の花被があります。種子はアリによって運ばれる(アリ散布型)です。江戸時代には細辛(サイシン)の名で、葉の形、斑紋葉柄の色、花など変化を楽しみました。



②ヨメナ (キク科ヨメナ属)  
 道端にも生える丈夫な多年草で、地下茎で増えていきます。若菜を摘んで食べれます。

③シロダモ (クスノキ科シロダモ属)  
 山野に生える常緑高木。雌雄異株で果実は翌年に熟するので、去年のものがいま果実となっています。そのため花と果実を同時に見ることができます。種子をろうそく用のつづ鑑や灯用にもちいました。



④ゴマ (ゴマ科ゴマ属)  
 ゴマの果実は短円筒形でその中が4室に分かれています。熟すると裂開し種子(ゴマ)が飛び出しますので、裂開しないうちに収穫し、裂開させ種子を乾燥させているところです。



⑤ホトトギス (ユリ科ホトトギス属)  
 花の斑点を鳥のホトトギスの胸に斑点に見立てたものといわれます。山地の湿ったところに生える多年草で、茎は分枝しない。花柱は深く3裂し、先端でまた2裂する。おしべは子房囲んで立ち上がり、上部で外側にひらく、先端はT字形をし、薬を付ける。ユニークな花に形をしています。

